

BOOK  
REVIEW

## 早すぎる兄の死と世界的な美の殿堂

『メトロポリタン美術館と警備員の私  
—世界中の＜美＞が集まるこの場所で』

パトリック・プリングリー 著/山田 明 訳

歳が近く仲の良かった兄が、闘病生活を経て20代でこの世を去った。誰もが知る有名企業に勤めていたプリングリーだが、最も身近な肉親の死に打ちひしがれてしまう。もともと自信がなかった仕事には、ますます身が入らない。場所はニューヨーク。つらい会社を辞めて、美術館の警備員になる。そこでは、紺色の制服に身を包み、広くて静かな展示室で何時間もただ立ち尽くす。これまでのようにキーボードに向かって文字を打つわけでもなく、神経をすり減らして会社の内外と厳しい交渉を重ねるわけでもない。締切に追われることもなければ、騒がしい声を聞くこともない。ひたすら立っているだけである。しかし彼の心は戦場ではなく、兄を失った喪失感だけに埋め尽くされ、世の中全部灰色である。書評子は題を見て「美術館の裏方の話って面白そう」と本書を手にとったのだが、その期待は見事に外れてしまった。本書は警備員の仕事小説なのだが、身内の不幸の物語でもある。そして、このプリングリーの心のざらつきが、読み物として堪能できる。若い男の孤独と身のよじり具合に引き込まれる。裏方話の期待以上の一冊であった。

パリのルーブル美術館も有名だが、このメトロポリタン美術館もすごい。ただ広いだけでなく、あまたある収蔵品は超のつく一級品ばかりである。警備員は、当日朝に「今日はセクションA」と割り当てられた部署に立つ。そして1時間ごとに、その部署内で少しずつ立ち位置を変える。黙っていても、来館者に話しかけられる。学芸員ではなく警備員の

で展示品について解説する義務はないの  
だろうが、プリングリーは答えていた。  
口にせるセリフと心の中でつぶやくセリ  
フが違うのは、誰だって同じだろう。プ  
リングリーもあれこれと胸のうちに思い  
を巡らせている。  
0.12 毎日何時間も立ち続けるのでお気に入り  
の展示品もできて、その鑑賞手法につ  
いてプリングリーなりの考えが述べられ  
ている。専門家による解説は読まず、た  
だじっと向き合っ作品と会話するのが  
プリングリーらしい。ただしこれは、  
一般来館者のように数秒から数分では  
なく、何十分と眺めていられる警備員な  
らでは鑑賞法だろう。よほど気に入った  
のか、プリングリーによるデッサンが挿  
絵になっているものもある。どの展示品  
もホームページで高解像度の写真を無  
料で見ることができるので、それを眺め  
ながら読むのもお勧めしたい。映画『目撃』  
(原題“Absolute Power”)は米国東海岸  
が舞台で、美術館に座って模写する高  
齢男性が主役である。「あれはもしか  
して?」と調べてみたが、メトロポリタ  
ン美術館ではなかった。日本の美術館では  
ほとんどの者は足早に回って行き、デッ

サントころか立ち止まる者は少ない。混  
雑する人気の展示会だと、立ち止まられ  
ずに押し流されてしまう。

後世に残る作品を生み出した偉大な芸  
術家がどんな思いで制作したのか、プリ  
ングリーは考える。後に大家と呼ばれる芸  
術家も、現実には生活の垢にまみれていた  
に違いない。そしてプリングリーがたどり  
着いた結論の一つは、天才というのは技  
術が優れただけでなく、誰も気づかない  
細部までこだわって打ち込める集中力を  
備えた完全主義者でもあったことである。

プリングリーは直接には説いていない  
が、芸術が鑑賞者に及ぼす力が絶大であ  
ることを、本書をとおして知ることがで  
きる。書評子は数年前に学会でオランダ  
のハーグを訪れ、市立美術館でモンドリ  
アンの『花咲くリンゴの樹』の本物を初  
めて観た。大昔から好きだった絵を、間  
近から、静かな部屋で独り占めである。  
あの感動は、言葉では表せない。涙まで  
は流していなかったが、その美しさに圧  
倒されていた。絵に向かい合ったこの胸  
が、絵から伸びた透明な平手でずーんと  
押されているようだった。同市内のマウ  
リッツハイス美術館では、フェルメール  
の『真珠の耳飾りの少女』を眼の前でじ  
いっとながめていた。幸せな時間だっ  
た。書評子が伝えられない美の力を、プ  
リングリーはうまく述べている。

来館者や同僚警備員との何気ないやり  
とりとともに、プリングリーの生の声が  
記されている。陽気でもなく社交的でも  
なかったが、気脈の通じる同僚を見つけ  
ることができた。人種のサラダボウルと  
呼ばれるニューヨークだけあって、警備  
員の出自は世界中に渡る。ずっと下を向  
いていたプリングリーにも、少しずつ変  
化が現れる。美の力も助けになったのか  
もしれない。巨大美術館の舞台裏事情を  
垣間見ながら、プリングリーの日常を応  
援してもらいたい。

(以下同) 水谷 光 (市立貝塚病院 麻酔科・中央材料室)

児童文学はどうして  
外国ものばかりが読まれるのか

『子どもと文学 増補新版』

斎藤 惇夫 解説

目下住処の沖縄・読谷村で、しばらく前  
から読谷村図書館の協力のもと“Book  
Club”という名の読書会を催している。  
この度、参加者の希望で米国の作家シェ  
ル・シルヴァスタイン作『おおきな木』  
(英題“The Giving Tree”, 1964)を扱  
うことになった。児童文学の範疇に入る。  
これまでこの類の本をじっくり読み解い  
たことはなく、そこでたまたま書店で目  
についた本書を頼りに、どんな点に注  
意して読めばいいのか、ノウハウを教わる  
ことにした。

2024年9月に刊行されたばかりの文  
庫であるが、内容的には1967年の福音  
館書店版(初版は1960年4月、中央公  
論社刊)を底本とし、講演と回想を加え  
たものである。

そもそも本書は、児童文学という共通  
の興味をもつ友人同士が最終的に6人  
集い[この中には「ノンちゃん雲に乗る」  
(1951)などで高名な児童文学作家・翻  
訳家の石井 桃子もいる]、およそ5年に  
わたり月に1回ほど、日本児童文学に  
大きな足跡を残した作家たちの作品を一  
行一行丹念に読み解き、活発に議論を交  
わした結果生まれた珠玉の児童文学論で  
ある。このいわば学習会が開催された時  
期は半世紀以上も前だが、本書で開陳さ  
れた彼らの知見や洞察は今もって決して  
色あせていない。

第1部で組上に乗せられるのは、小川  
未明、浜田 広介、坪田 譲治、宮沢 賢治、  
千葉 省三、新美 南吉。いずれも日本を  
代表する児童文学作家だが、全員ではな  
くとも何人かの作品は読んだことがある  
だろうし、あるいは幼き頃に親などに読



中公文庫  
2024年  
1,000円+税

んでもらったことがあるだろう。各作家  
の論述にひとりの執筆者があてがわれて  
いるが、むしろ6人の総意として読ん  
でいい。  
本書でわれわれはこれら児童文学作家  
への辛辣な批判に出会うだろう。その舌  
鋒は鋭い。確かに各作家について経歴や  
代表的作品の紹介・解説、それから作風  
やその変化、そして作品を選んでその特  
徴や特質が論じられている。しかし、主  
眼はそこにあるのではない。彼らの見方  
では、本来児童文学は子どものための文  
学であるにもかかわらず、道徳・倫理の  
押し付けや過剰な情景描写・心理描写な  
ど大人の論理が勝ちすぎ、それがストー  
リー性の欠落につながったりして、結局  
「子ども不在」の文学となっていると力  
説する。

きわめつけは、「ファンタジーほど日  
本の児童文学に欠けているものはありま  
せんでした」の一文である。たとえば未  
明の『赤いろうそくと人魚』について、  
アンデルセンの『人魚姫』と比較してい  
かにファンタジーの世界を楽しむことが  
できないか。その不満を率直に吐露して  
いる。子どもの頃の児童文学の読書体験

を思い出してほしい。『宝島』『ガリヴァ  
ー旅行記』『十五少年漂流記』『家なき子』  
『トム・ソーヤの冒険』などが、心躍る  
作品として第一に挙がるのではないか。  
子どもの文学の本質について論じた第II  
部に興味深い表が掲載されている。伝承  
文学も創作文学も、好んで読まれる作品  
は年齢が上になるにつれて外国ものが際  
立ち、日本ものの影が薄くなる。執筆者  
一隊は、この表のみならず、児童文学の  
文献や理論書などを手引きとして、日本  
の児童文学において児童文学自体の源で  
あるファンタジーがいかに誤解され、軽  
視されてきたかということについて説得  
力のある議論を展開する。

本書の刊行後、この見方に対して賛否  
両論、応酬があったそうである。それは  
措くとして、ファンタジーの欠落が日本  
児童文学の限界を如実に示していること  
は確かであろう。きっと批判の矛先の正  
当性に同意しながら読み進めることがで  
きるはずである。

ただし、宮沢賢治を除いてである。彼  
の作品は、構成、描写力、ユーモアのセ  
ンス、そして豊かな空想力、それにもと  
づく独特のファンタジーなど、児童文学  
に不可欠な要素をすべて兼ね備えている。  
子どもには難しいというこれまでの定見  
を覆し、むしろ子どものための作家であ  
ると見事に解き明かしていることを加え  
ておく。

付録の講演と回想は、執筆者でもある  
二人の演者の経験・体験を下地にして、  
あらためて児童文学に不可欠な要素を詳  
しく論じている。

読み終えれば、今後児童文学を読み解  
くうえで必要不可欠な要素や視点など有  
益な知見をたっぷりと得ることができる。  
指南書として推薦できることは言うまで  
もない。それを尺度として、今や絶大な  
人気を誇る『ぐりとぐら』シリーズやス  
タジオジブリの作品を測ってみたらどう  
だろうか。

関本 英太郎



# BOOK REVIEW

流用

## 妖怪が世界を徘徊している。 EBM という名の妖怪である。

80% + 20%

長体 75%

### 『なぜEBMは神格化されたのか —誰も教えなかったエビデンスに基づく医学の歴史』

大脇 幸志郎 著

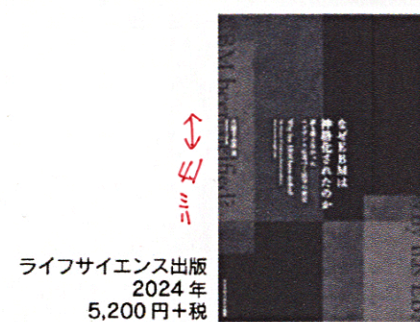
160頁前後

現在の医療において、EBM（根拠に基づく医療）という概念を無視して語ることはできないが、「根拠に基づく」とは、それまでの医療がまったく根拠なく行われてきたような印象をもたせようとした、提唱者の戦略的誇張である。どんな時代であっても、どんな国・地域であっても、医療行為は“それなりの”根拠をもって行われてきたのであり、それが患者にとって有益であったかどうか、医療行為の“根拠”を評価する基準となるはずである。そして根拠が妥当なものかどうかは、過去はダメで今は良くなったという無邪気な進歩史観を妄信せず、現在のEBMという手法についても、その有効性を等しく検証し批判する必要がある。

現在、一般的にEBMと呼ばれているものは、統計学的な価値観にもとづく論文のランクづけ、すなわちメタ解析とRCTを最上位とし、専門家の個人的意見を最下位とするランクづけ（それはEBMの一部に過ぎないという逃げ道はあらかじめ用意されている）と、それにもとづく臨床対応の選択であろうが、そのランクづけが唯一の、あるいは最良の尺度であるというエビデンスはどこにもない（はずだ）。またそれが臨床的にどれだけの価値があるかも不明である。

統計的な結論は公衆衛生的な政策決定には有意義であっても、そのままでは個人には当てはまらないし、しかも困ったこと（？）に医療というのは統計から外れた特異例、希少例を無視できない（しない）営みなのである。実際の臨床では、EBMに他人を説得するときの方便以上の意味を求めるのは困難ではないだろうか。

そもそも、複雑な統計技術を使わなければ違いがわからないような差が、はた



ライフサイエンス出版  
2024年  
5,200円＋税

1/2ページ/明解W2

して臨床的に意味があるのかどうか疑問である。「点は打ちよう、線は引きよう」というやや自虐的な言葉を、統計学者から昔教わったことがあるが、本書で「データを拷問にかけろ」という表現がある（Mills JL. Data torturing. N Engl J Med 1993; 329: 1196-9）ことを知った。大規模データベースがあれば、それをあれこれ操作する（これを拷問になぞらえている）ことで、研究者の期待するような“有意な結果”を（偶然であっても）引き出すことが可能だということだ。それだけが理由ということではないが、EBMは、そのもっともらしい主張といかがわしい内容のために、医療の質を向上させるよりもむしろ、既存の権威や利益システムを温存・補完する方向に進んできた（あるいは進んでいる）のではないか、というのが著者の懸念のように見える。

著者は東京大学医学部医学科を卒業した後、すぐには国家試験を受けず、出版社勤務や医療情報サイトの運営などを経て、卒後10年頃から医師としても働きながら執筆および動画チャンネルの配信を行っている人物である。こういう生き方を見ると、東京大学のリベラルアーツの伝統は健在かと嬉しく思う。

本書は学術的ではないと著者は謙遜しているが、そんなことはない。1000編

を越える参考文献と45編の図表の引用、そして得られた情報の吟味とそれらを組み立てる論理および（時々皮肉っぽい表現はあるものの）おおむね適切に選択された文章表現は、十分に学術的である。

本書ではEBMを、①実践としてのEBM＝臨床医学における実証的アプローチ、②社会運動としてのEBM＝EBM運動、Sackett以降の大規模な研究計画やガイドラインの類、③流行語としてのEBM＝鉤括弧つきのEBM＝EBM運動の論者が「本来のEBMではない」と否定しそうな出所不明の理論と過大な期待、の三つの視座を構えて、現在のEBMの成立過程を分析している。当然ながら、臨床医学での実証的アプローチはSackett以前からの分析になる。もっとも19世紀より前は、診断にせよ治療にせよ記録に乏しいので、現実的には19世紀に芽生えてきた科学的思考法とその成熟、および思考の実践である医療行為とその成績公開、から始まるとしてよい。

本書は大部ではあるが、文章が明快なので読みやすい。また参考文献の一端を記載するのは当然として、用語解説、主な登場人物の紹介、年表などがついており、これらも読者の理解の助けとなる。書評子が膝を打ったのは、主要医学雑誌の紹介と、1990年以降のそれらの歴代編集長の交代の年表である。なるほど。学術雑誌は医学・医療業界の重要なステークホルダーであるし、編集長はその中心人物であるのだから、それが誰なのかは広い意味で出版バイアスの原因になる可能性がある。著者の目配りの広さに感謝したい。

75%

福家 伸夫

（帝京大学ちば総合医療センター）